

## 幼児のアクティブ・チャイルド・プログラムと自由遊び中に現れる基本動作の違い

順天堂大学大学院  
スポーツ健康科学研究科  
学籍番号：4119015  
氏名：黒川 優介

### 【目的】

本研究では、幼児における ACP の活動中の基本動作の種類と頻度の実態を明らかにし、自由遊びとの比較を通してその特徴を検討することを目的とした。

### 【方法】

千葉県のある R 子ども園に通う 12 名（男児 10 名，女児 2 名）（ $6.1 \pm 0.3$  歳）を対象とした。園庭での自由遊びと ACP の運動の様子を 30 分間撮影し、撮影した映像から基本動作のカウントを行なった。また、基本動作は 34 種類の基本動作でカウントを行い、さらに姿勢維持系，移動系，操作系の 3 つの運動カテゴリーに分類した。基本動作の発現と体力との相関を明らかにするため 25m 走，立ち幅跳び，ボール投げの 3 種類の体力測定を実施した。

### 【結果】

全基本動作と各運動カテゴリーの頻度と種類数の平均値を自由遊びと ACP とで比較した結果、姿勢維持系の発現頻度（ACP： $41.5 \pm 10.0$  回，自由遊び： $26.0 \pm 11.2$  回）および操作系の発現種類数（ACP： $4.8 \pm 1.4$  種類，自由遊び： $3.3 \pm 1.4$  種類）において ACP の方が自由遊びより有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。操作系の発現頻度（ACP： $60.3 \pm 13.0$  回，自由遊び： $88.0 \pm 43.0$  回）および移動系の発現種類数（ACP： $4.3 \pm 0.9$  種類，自由遊び： $6.6 \pm 0.7$  種類）において ACP の方が自由遊びより有意に低かった（ $p < 0.05$ ）。これらの結果から、ACP は運動遊びのルールや特性上決まった基本動作が繰り返し発現したことにより、自由遊びよりも発現頻度が高まるが、運動遊びによっては自由遊びよりも基本動作の発現が少ない、または発現しない基本動作があることが示唆された。また、自由遊びと ACP における基本動作の発現と体力との相関関係に関しては、自由遊びと ACP とともに姿勢維持系の頻度との中程度の相関が認められた（ $|r| = 0.35 - 0.52$ ）。しかし、他の基本動作の発現と体力との相関関係は不明確であり、本研究の結果だけで体力と基本動作の発現の相関関係を結論づけることはできない。

### 【結論】

ACP はその運動遊びの内容に依存して特定の基本動作の発現頻度が高まるが、運動遊びの内容によっては自由遊びよりも基本動作の発現頻度や種類数が少ない、またはほとんど発現しない基本動作がある。